

通常の学級における包摂力のある好事例

【キーワード】	自己理解の困難、自己理解の促進
【学校、学年】	高等学校 【 3 】年
【状況、様子等】	<p>○生徒Eの様子等</p> <ul style="list-style-type: none"> ・全体的に身体の動かし方がぎこちなく、特に指先に力を入れて行う作業に困難を伴うことがあった。 ・書くことについて、自分の考えを際限なく書いたり、字形が整わなかったりした。 ・実習のある授業では、作業の手順が理解できずに、わからないままの状態が強引に作業を進めることがあった。また、教師が指示をしても理解できていないのに、「わかりました」と言って活動を先に進めてしまうことがあった。 ・サポートを受けてできていることを、自分一人で「できる・できた」という認識になっており、自己理解が進まず、困り感のない状態が見られた。 ・そういった状態から、就職活動を前にして、自分の力だけではできないことを「できる」と認識して就職先を考えてしまうところがあった。
【対応・工夫】 支援、 合理的配慮、 基礎的環境 整備、学級経営、 支援体制 等	<ul style="list-style-type: none"> ・実習を行う際に、使用する器具に工夫を施し、指先の動きをサポートできるようにした。(手立て) ・活動に取り掛かる際は、「自分が今何をしないといけないのか」「やることを小さなタスクに分け、一つ一つ確認しながら行動する」「次に何をやるのか分からない時は先生に尋ねる」等を本生徒と一緒に確認するようにした。(手立て) ・実習中に作業でつまづいた時に、「それが『一人で取り組むには難しく困っている』状況である」と自己理解を促し、困った時の次の行動の方法を教えるようにした。(手立て) ・書く量を自分で調整するように促した。(合理的配慮) ・本生徒の現状を保護者と共有するための面談を、本生徒と保護者、担任、特別支援教育コーディネーター、進路担当とで行った。また、進路希望先に、キャリアサポーターが本生徒について説明等を行った。(支援体制) ・本生徒への支援の在り方については、校内支援委員会や生徒理解研修で職員に共有した。(支援体制) ・学校の様子等に関する情報提供書を作成し、医療機関に情報提供を行った。(支援体制)
【結果、変容等】	<ul style="list-style-type: none"> ・実習では、器具の工夫をすることによって、効率よく作業できる良さを感じている様子があった。 ・難しい場面がある時に、「こういう風にすればよいですか」、「どうすればいいですか」と聞くことができるようになった。 ・本生徒と保護者と面談の機会も設けたことで、「自分ではできていないことがある」「苦手なことがある」「できないことを『できます』と言ってしまふことがある」と認識できるようになった。 ・書く量を調整できるようになり、字形にも気をつけるようになった。 ・本生徒を交えた関係者との面談の実施は、自己理解を促す機会とすることができた。 ・本生徒は、自分の苦手なことをある程度適切に認識できる状態で、職場選びを検討できるようになってきた。